

# Notes on Sheaves on Manifolds

大柴寿浩

## はじめに

2023 年度から始めた [KS90] のセミナーのノート.

## 記号

次の記号は断りなく使う.

- 添字: なんらかの族  $(a_i)_{i \in I}$  を  $(a_i)_i$  とか  $(a_i)$  と略記することがある.

## 1 ホモロジー代数

### 1.3 複体の圏

$\mathcal{C}$  を加法圏とする.

注意. 加法圏とは次の 3 つの条件 (1)–(3) をみたす圏のことである.

- (1) どの対象  $X, Y \in \mathcal{C}$  に対しても  $\mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y)$  が加法群になり, どの対象  $X, Y, Z \in \mathcal{C}$  に対しても合成  $\circ: \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(Y, Z) \times \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Y) \rightarrow \mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(X, Z)$  が双線型である.
- (2) 零対象  $0 \in \mathcal{C}$  が存在する. さらに  $\mathrm{Hom}_{\mathcal{C}}(0, 0) = 0$  が成り立つ.
- (3) 任意の対象  $X, Y \in \mathcal{C}$  に対して積と余積が存在し, さらにそれらは同型になる. (それらを複積といい  $X \oplus Y$  とかく.)

圏  $\mathcal{C}$  から,  $\mathcal{C}$  の対象の複体の圏  $CC(\mathcal{C})$  を作ることができる. まず複体の定義をする. 圏  $\mathcal{C}$  の対象のと射の列

$$(1.3.1) \quad \cdot s \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdot s$$

を考える. この列  $X = ((X^n)_{n \in \mathbf{Z}}, (d_X^n)_{n \in \mathbf{Z}})$  が複体 (complex) であるとは, 任意の  $n \in \mathbf{Z}$  に対し

$$(1.3.2) \quad d_X^{n+1} \circ d_X^n = 0$$

が成り立つことをいう.

圏  $\mathcal{C}$  の対象の複体  $X = ((X^n), (d_X^n)), Y = ((Y^n), (d_Y^n))$  の間の射を,  $\mathcal{C}$  の射の族  $(f^n: X^n \rightarrow Y^n)_{n \in \mathbf{Z}}$  で, 図式

$$\begin{array}{ccccccc} \cdot s & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \cdot s & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \end{array}$$

を可換にする, すなわちどの番号  $n \in \mathbf{Z}$  に対しても

$$(1.3.3) \quad d_Y^n \circ f^n = f^{n+1} \circ d_X^n$$

が成り立つものとして定める.

以上の準備のもとで,  $\mathcal{C}$  の複体の圏  $C(\mathcal{C})$  を次のように定める.

- 対象:  $\text{Ob}(C(\mathcal{C})) = \{\mathcal{C} \text{ の複体} \}$
- 射:  $\text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) = \{\mathcal{C} \text{ の複体の射} \}$

このとき,  $C(\mathcal{C})$  は加法圏になる.

圏になることの証明.  $f: X \rightarrow Y$  と  $g: Y \rightarrow Z$  を  $C(\mathcal{C})$  の射とする.  $f$  と  $g$  の合成  $g \circ f$  は  $(g^n \circ f^n)_n$  で与えられる. これがうまくいくことは

$$\begin{array}{ccccccc} \cdot s & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \cdot s & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \\ & & \downarrow g^n & & \downarrow g^{n+1} & & \\ \cdot s & \longrightarrow & Z^n & \xrightarrow{d_Z^n} & Z^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \end{array}$$

が可換になることからわかる.

$X$  の恒等射は  $(\text{id}_{X^n})_n$  で与えられる. □

加法圏になることの証明.  $X$  と  $Y$  を  $\mathcal{C}$  の複体とする.

(1) 射の集合のアーベル群構造  $f, g \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y)$  に対し,  $f + g$  が  $(f^n + g^n)_n$  で定まる.

(2) 零対象の存在  $C(\mathcal{C})$  の零対象  $0$  は

$$\cdot s \rightarrow 0 \xrightarrow{0} 0 \xrightarrow{0} 0 \rightarrow \cdot s$$

で与えられる.

(3) 複積の存在  $X$  と  $Y$  の複積  $X \oplus Y$  は

$$\cdot s \longrightarrow X^{n-1} \oplus Y^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1} \oplus d_Y^{n-1}} X^n \oplus Y^n \xrightarrow{d_X^n \oplus d_Y^n} X^{n+1} \oplus Y^{n+1} \longrightarrow \cdot s$$

で与えられる. □

さらに  $\mathcal{C}$  がアーベル圏ならば,  $C(\mathcal{C})$  もアーベル圏になる.

注意. 加法圏  $\mathcal{C}$  がアーベル圏であるとは次の条件 (4), (5) をみたすことをいう.

(4) 任意の  $\mathcal{C}$  の射  $f: X \rightarrow Y$  に対し,  $f$  の核  $\text{Ker } f$  と余核  $\text{Coker } f$  が存在する.

(5) 任意の  $\mathcal{C}$  の射  $f: X \rightarrow Y$  に対し, 自然に定まる射  $\text{Coim } f \rightarrow \text{Im } f$  は同型である.

証明.  $X$  と  $Y$  を  $\mathcal{C}$  の複体とする.

(4) 核と余核の存在 複体の射  $f: X \rightarrow Y$  に対し, 核  $\text{Ker } f$  は  $(\text{Ker } f^n)_n$  で, 余核  $\text{Coker } f$  は  $(\text{Coker } f^n)_n$  で与えられる.

コメント (4/24). 「 $\text{Ker } f$  の differential の構成はどうなっていますか？」

次の図式を考える.

$$\begin{array}{ccccccc} \cdot s & \longrightarrow & \text{Ker } f^n & \xrightarrow{\bar{d}_X^n} & \text{Ker } f^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \\ & & \downarrow \iota^n & & \downarrow \iota^{n+1} & & \\ \cdot s & \longrightarrow & X^n & \xrightarrow{d_X^n} & X^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \\ & & \downarrow f^n & & \downarrow f^{n+1} & & \\ \cdot s & \longrightarrow & Y^n & \xrightarrow{d_Y^n} & Y^{n+1} & \longrightarrow & \cdot s \end{array}$$

ここで,  $\iota^n$  は  $\text{Ker } f^n$  の普遍性から自然に定まる射である.  $\bar{d}_X^n: \text{Ker } f^n \rightarrow \text{Ker } f^{n+1}$  が  $d_X^n \circ \iota^n$  によって定められることを示せば良い.

$$f^{n+1} \circ d_X^n \circ \iota^n = d_Y^n \circ f^{n+1} \circ \iota^n = d_Y^n \circ 0 = 0$$

より,  $d_X^n \circ \iota^n$  は  $\text{Ker } f^{n+1}$  に値を取る. したがって,  $\bar{d}_X^n: \text{Ker } f^n \rightarrow \text{Ker } f^{n+1}$  が定まる.

(5) 余像と像が同型になること 各次数  $n$  ごとに  $\text{Coim } f^n \cong \text{Im } f^n$  が成り立つことから従う. □

圏  $C(\mathcal{C})$  の充満部分圏  $C^+(\mathcal{C})$ ,  $C^-(\mathcal{C})$ ,  $C^b(\mathcal{C})$  を

$$\begin{aligned} \text{Ob}(C^+(\mathcal{C})) &= \left\{ 0 \rightarrow X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \rightarrow \cdot s \quad (n \ll 0) \right\}, \\ \text{Ob}(C^-(\mathcal{C})) &= \left\{ \cdot s \rightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \rightarrow 0 \quad (n \gg 0) \right\}, \\ \text{Ob}(C^b(\mathcal{C})) &= \{ 0 \rightarrow X^n \rightarrow \cdot s \rightarrow X^m \rightarrow 0 \quad (n \ll 0, m \gg 0) \} \end{aligned}$$

で定める.

$\mathcal{C}$  の対象  $X$  に対し  $C(\mathcal{C})$  の対象

$$\cdot s \rightarrow 0 \rightarrow X \rightarrow 0 \rightarrow \cdot s$$

を対応させることによって、忠実充満な関手  $\mathcal{C} \hookrightarrow C(\mathcal{C})$  が定まる。

$k$  を整数とする。  $\mathcal{C}$  の複体

$$X: \cdot s \longrightarrow X^{n-1} \xrightarrow{d_X^{n-1}} X^n \xrightarrow{d_X^n} X^{n+1} \longrightarrow \cdot s$$

に対し、  $X[k]$  を  $X[k]^n = X^{n+k}$ ,  $d_{X[k]}^n = (-1)^k d_X^{n+k}$  で定める。図式でかくと

$$X[k]: \cdot s \rightarrow X^{n+k-1} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k-1}} X^{n+k} \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} X^{n+k+1} \rightarrow \cdot s$$

のようになる。  $X$  から  $Y$  への射  $f: X \rightarrow Y$  に対し、  $f[k]: X[k] \rightarrow Y[k]$  を  $f[k]^n = f^{n+k}$  で定める。  $X$  を  $X[k]$  に対応させることで関手  $[k]: C(\mathcal{C}) \rightarrow C(\mathcal{C})$  が定まる。この関手を次数  $k$  のシフト関手と呼ぶ。

$[k]$  が関手になることの証明。  $X[k]$  が複体になること：

$$(-1)^k d_X^{n+k} \circ (-1)^k d_X^{n+k-1} = (-1)^{2k} d_X^{n+k} \circ d_X^{n+k-1} = 0.$$

$f[k]$  が複体の射になること：

$$\begin{array}{ccccccc} \cdot s & \longrightarrow & X^{n+k} & \xrightarrow{(-1)^k d_X^{n+k}} & X^{n+k+1} & \longrightarrow & \cdot s \\ & & \downarrow f^{n+k} & & \downarrow f^{n+k+1} & & \\ \cdot s & \longrightarrow & Y^{n+k} & \xrightarrow{(-1)^k d_Y^{n+k}} & Y^{n+k+1} & \longrightarrow & \cdot s \end{array}$$

が可換になることを示せばよい。

$$f^{n+k+1} \circ (-1)^k d_X^{n+k+1} = (-1)^k f^{n+k+1} \circ d_X^{n+k+1} = (-1)^k d_Y^{n+k+1} \circ f^{n+k}.$$

$[k]$  が合成を保つこと： $f: X \rightarrow Y$ ,  $g: Y \rightarrow Z$  を複体の射とする。このとき

$$(g[k] \circ f[k])^n = g[k]^n \circ f[k]^n = g^{n+k} \circ f^{n+k} = (g \circ f)^{n+k} = (g \circ f)[k]^n$$

が成り立つ。

$[k]$  が恒等射を保つこと： $\text{id}_X[k]^n = \text{id}_X^{n+k} = \text{id}_{X[k]}^n$ . □

■ホモトピー  $\mathcal{C}$  の複体の圏  $C(\mathcal{C})$  から、ホモトピックな射を同一視することによって、新たな圏  $K(\mathcal{C})$  が得られる。まず準備。

$C(\mathcal{C})$  を圏  $\mathcal{C}$  の複体の圏とする。  $X, Y \in C(\mathcal{C})$  とする。  $f: X \rightarrow Y$  が  $0$  にホモトピックであるとは、  $\mathcal{C}$  の射の族  $(s^n: X^n \rightarrow Y^{n-1})$  で、

$$(1.3.4) \quad f^n = d_Y^{n-1} \circ s^n + s^{n+1} \circ d_X^n \quad (n \in \mathbf{Z})$$

となるものが存在することをいう。

$f, g: X \rightarrow Y$  に対し,  $f - g$  が 0 にホモトピックであるとき,  $f$  と  $g$  はホモトピックであるといい,  $f \simeq g$  とかく.  $f$  が 0 とホモトピックであることを  $f \simeq 0$  で表す. このとき  $s = (s^n)$  を  $f$  と  $g$  の間のホモトピーという.  $\simeq$  は同値関係である.

証明.  $f, g, h$  を  $X$  から  $Y$  への  $\mathcal{C}$  の複体の射とする.

反射律  $(s^n = 0)$  が  $f$  と  $f$  の間のホモトピーを与える.

対称律  $f$  と  $g$  の間のホモトピーを  $s$  とするとき,  $-s$  が  $g$  と  $f$  の間のホモトピーを与える.

推移律  $f$  と  $g$  の間のホモトピーを  $s$ ,  $g$  と  $h$  の間のホモトピーを  $t$  とする. このとき,  $s + t$  が  $f$  と  $h$  の間のホモトピーを与える.  $\square$

命題 1.1.  $X, Y \in C(\mathcal{C})$  に対し,  $\text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y)$  の加法部分群  $\text{Ht}(X, Y)$  を

$$(1.3.5) \quad \text{Ht}(X, Y) := \{f \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) \mid f \simeq 0\}$$

で定める. 複体の射  $f: X \rightarrow Y$  と  $g: Y \rightarrow Z$  のどちらかが 0 にホモトピックならば, 合成  $g \circ f$  は 0 にホモトピックになる. したがって, 射の合成は次の写像をひきおこす.

$$\begin{aligned} \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(Y, Z) \times \text{Ht}(X, Y) &\rightarrow \text{Ht}(X, Z), \\ \text{Ht}(Y, Z) \times \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) &\rightarrow \text{Ht}(X, Z). \end{aligned}$$

証明.  $f \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y)$ ,  $g \in \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(Y, Z)$  とする.

$f \simeq 0$  のとき,  $s$  を 0 とのホモトピーとすると,  $g \circ f$  と 0 との間のホモトピーは

$$(g^{n-1} \circ s^n: X^n \rightarrow Y^{n-1} \rightarrow Z^{n-1})_n$$

で与えられる.

$g \simeq 0$  のとき,  $t$  を 0 とのホモトピーとすると,  $g \circ f$  と 0 との間のホモトピーは

$$(t^n \circ f^n: X^n \rightarrow Y^n \rightarrow Z^{n-1})_n$$

で与えられる.  $\square$

以上の準備のもとで, 圏  $\mathcal{C}$  のホモトピー圏  $K(\mathcal{C})$  を次のように定める.

- 対象:  $\text{Ob}(K(\mathcal{C})) = \text{Ob}(C(\mathcal{C}))$
- 射:  $\text{Hom}_{K(\mathcal{C})}(X, Y) = \text{Hom}_{C(\mathcal{C})}(X, Y) / \text{Ht}(X, Y)$

$K(\mathcal{C})$  は加法圏になる.

$K(\mathcal{C})$  が加法圏になることの証明. 命題 1.1 より, 射の合成がきちんと定まる.

各  $X, Y \in K(\mathcal{C})$  に対する  $\text{Hom}_{K(\mathcal{C})}(X, Y)$  のアーベル群構造は  $\text{Ht}(X, Y)$  による剰余群の構造として得られ, さらに命題 1.1 より, 合成の双線型性が得られる.

零対象と複積は  $C(\mathcal{C})$  と同様である.  $\square$

圏  $K(\mathcal{C})$  の充満部分圏  $K^+(\mathcal{C})$ ,  $K^-(\mathcal{C})$ ,  $K^b(\mathcal{C})$  を, それぞれ  $C^+(\mathcal{C})$ ,  $C^-(\mathcal{C})$ ,  $C^b(\mathcal{C})$  と同じ対象をとって定める.

■コホモロジー  $\mathcal{C}$  をアーベル圏とする．  $X \in \mathbf{C}(\mathcal{C})$  に対し，

$$\begin{aligned} Z^k(X) &:= \text{Ker } d_X^k, \\ B^k(X) &:= \text{Im } d_X^{k-1}, \\ H^k(X) &:= \text{Ker } d_X^k / \text{Im } d_X^{k-1} \end{aligned}$$

とおく．  $H^k(X)$  を複体  $X$  の  $k$  次のコホモロジーという．

注意．完全列  $0 \rightarrow X \rightarrow Y \rightarrow Z \rightarrow 0$  に対し，  $Z$  を  $Y$  の商対象といい，  $Y/X$  とかく． 一般に単射  $i: X \hookrightarrow Y$  の余核  $\text{Coker } i$  を  $Y/X$  とかける．

任意の  $k$  に対し  $H^k$  は  $\mathbf{C}(\mathcal{C})$  から  $\mathcal{C}$  への加法関手を定める．

$$(1.3.6) \quad H^k(X) = H^0(X[k])$$

$f: X \rightarrow Y$  が 0 とホモトピックならば，  $H^k(f): H^k(X) \rightarrow H^k(Y)$  は 0． よって  $H^k$  は  $\mathbf{K}(\mathcal{C})$  から  $\mathcal{C}$  への関手を定める．

完全列たち

$$\begin{aligned} X^{k-1} &\rightarrow Z^k(X) \rightarrow H^k(X) \rightarrow 0, \\ 0 &\rightarrow H^k(X) \rightarrow \text{Coker } d_X^{k-1} \rightarrow X^{k+1}, \\ 0 &\rightarrow Z^{k-1}(X) \rightarrow X^{k-1} \rightarrow B^k(X) \rightarrow 0, \\ 0 &\rightarrow B^k(X) \rightarrow X^k \rightarrow \text{Coker } d_X^{k-1} \rightarrow 0, \\ 0 &\rightarrow H^k(X) \rightarrow \text{Coker } d_X^{k-1} \xrightarrow{d_X^k} Z^{k+1}(X) \rightarrow H^{k+1}(X) \rightarrow 0. \end{aligned}$$

命題 1.2.  $0 \rightarrow X \rightarrow Y \rightarrow Z \rightarrow 0$  を  $\mathbf{C}(\mathcal{C})$  の完全列とする． このとき，  $\mathcal{C}$  における次の長完全列が存在する．

$$\cdot s \rightarrow H^n(X) \rightarrow H^n(Y) \rightarrow H^n(Z) \xrightarrow{\delta} H^{n+1}(X) \rightarrow \cdot s.$$

■切り落とし  $X \in \mathbf{C}(\mathcal{C})$  と整数  $n$  に対し，  $\tau^{\leq n}(X), \tau^{\geq n}(X) \in \mathbf{C}(\mathcal{C})$  を

$$(1.3.7) \quad \tau^{\leq n}(X): \cdot s \rightarrow X^{n-2} \rightarrow X^{n-1} \rightarrow \text{Ker } d^n \rightarrow 0 \rightarrow \cdot s,$$

$$(1.3.8) \quad \tau^{\geq n}(X): \cdot s \rightarrow 0 \rightarrow \text{Coker } d^{n-1} \rightarrow X^{n+1} \rightarrow X^{n+2} \rightarrow \cdot s$$

で定める． このとき，  $\mathbf{C}(\mathcal{C})$  における次の射が得られる．

$$\tau^{\leq n}(X) \rightarrow X, \quad X \rightarrow \tau^{\geq n}(X),$$

また，  $n' \leq n$  ならば

$$\tau^{\leq n'}(X) \rightarrow \tau^{\leq n}(X), \quad \tau^{\geq n'}(X) \rightarrow \tau^{\geq n}(X).$$

- 命題 1.3.** 1. 自然な射  $H^k(\tau^{\leq n}(X)) \rightarrow H^k(X)$  は  $k \leq n$  ならば同型であり,  $k > n$  では  $H^k(X) = 0$  である.
2. 自然な射  $H^k(X) \rightarrow H^k(\tau^{\geq n}(X))$  は  $k \geq n$  ならば同型であり,  $k < n$  では  $H^k(X) = 0$  である.

**注意 1.4.** ホモトピー同値

## 1.4 写像錐

$\mathcal{C}$  を加法圏とし  $f: X \rightarrow Y$  を  $C(\mathcal{C})$  の射とする.

**定義 1.5.**  $f$  の写像錐  $M(f)$  とは次で定まる  $C(\mathcal{C})$  の対象である.

$$\begin{cases} M(f)^n = X^{n+1} \oplus Y^n, \\ d_{M(f)}^n = \begin{bmatrix} d_{X[1]}^n & 0 \\ f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix} \end{cases}$$

射  $\alpha(f): Y \rightarrow M(f)$  と  $\beta(f): M(f) \rightarrow X[1]$  を次で定める.

$$(1.4.1) \quad \alpha(f)^n = \begin{bmatrix} 0 \\ \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix},$$

$$(1.4.2) \quad \beta(f)^n = [\text{id}_{X^{n+1}} \quad 0].$$

**コメント (4/24).** 「どうして逆に  $X \rightarrow M(f)$  や  $M(f) \rightarrow Y$  じゃないんですか？」

例えば, 逆に  $\gamma^n: M(f)^n \rightarrow Y^n$  を  $\begin{bmatrix} 0 & \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix}$  で定めようとしても,

$$\begin{aligned} \gamma^{n+1} \circ d_{M(f)}^n &= \begin{bmatrix} 0 & \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix} \begin{bmatrix} d_{X[1]}^n & 0 \\ f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} f^{n+1} & d_Y^n \end{bmatrix}, \\ d_Y^n \circ \gamma^n &= d_Y^n \circ \begin{bmatrix} 0 & \text{id}_{Y^n} \end{bmatrix} = \begin{bmatrix} 0 & d_Y^n \end{bmatrix} \end{aligned}$$

となり, 両者は一致しない. したがって,  $\gamma$  は複体の射にならない.  $X \rightarrow M(f)$  も同様である. したがって,  $M(f)$  に対して定まる自然な射は  $\alpha, \beta$  のようにせざるを得ない.

**補題 1.6.** 任意の  $C(\mathcal{C})$  の射  $f: N \rightarrow Y$  に対し,  $\phi: X[1] \rightarrow M(\alpha(f))$  で次の条件をみたすものが存在する.

1.  $\phi$  は  $K(\mathcal{C})$  で同型である,
2. 次の図式は  $K(\mathcal{C})$  で可換になる:

$$\begin{array}{ccccccc} Y & \xrightarrow{\alpha(f)} & M(f) & \xrightarrow{\beta(f)} & X[1] & \xrightarrow{-f[1]} & Y[1] \\ \downarrow \text{id}_Y & & \downarrow \text{id}_{M(f)} & & \downarrow \phi & & \downarrow \text{id}_{Y[1]} \\ Y & \xrightarrow{\alpha(f)} & M(f) & \xrightarrow{\alpha(\alpha(f))} & M(\alpha(f)) & \xrightarrow{\beta(\alpha(f))} & Y[1]. \end{array}$$

2023/05/01

## 1.5 三角圏

$\mathcal{C}$  を加法圏とし,  $T: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}$  を自己関手とする.  $\mathcal{C}$  の三角とは射の列

$$X \rightarrow Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$$

のことである.

**定義 1.7.** 三角圏  $\mathcal{C}$  は次のデータ (1.5.1), (1.5.2) と規則 (TR0)–(TR5) からなる. 1.7

データ

(1.5.1) 加法圏  $\mathcal{C}$  と自己関手  $T: \mathcal{C} \rightarrow \mathcal{C}$  の組,

(1.5.2) 特三角 (distinguished triangle) の族.

規則 (TR0) 特三角に同形な三角は特三角である.

(TR1) 任意の対象  $X \in \mathcal{C}$  に対し,  $X \xrightarrow{\text{id}_X} X \rightarrow 0 \rightarrow T(X)$  は特三角である.

(TR2)  $\mathcal{C}$  の任意の射  $f: X \rightarrow Y$  は特三角  $X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$  に埋め込める. つまり  $Z \in \mathcal{C}$  で  $X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$  が特三角となるものが存在する.

(TR3)  $X \xrightarrow{f} Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X)$  が特三角であることと  $Y \xrightarrow{g} Z \xrightarrow{h} T(X) \xrightarrow{-T(f)} T(Y)$  が特三角であることは同値である.

(TR4) 2つの特三角  $X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z \rightarrow T(X)$ ,  $X' \xrightarrow{f'} Y' \rightarrow Z' \rightarrow T(X')$  に対し, 可換図式

$$\begin{array}{ccc} X & \xrightarrow{f} & Y \\ \downarrow u & & \downarrow v \\ X' & \xrightarrow{f'} & Y' \end{array}$$

は特三角の射に埋め込める.

(TR5) (八面体公理). 3つの特三角

$$X \xrightarrow{f} Y \rightarrow Z' \rightarrow T(X),$$

$$Y \xrightarrow{g} Z \rightarrow X' \rightarrow T(Y),$$

$$X \xrightarrow{g \circ f} Z \rightarrow Y' \rightarrow T(X)$$

に対し,

## 1.6 圏の局所化



## 2 層コホモロジー

アーベル層の圏はアーベル圏になる。したがって層の導来圏が考えられる。

$\cdot \otimes \cdot$  の導来関手を考えたいが、テンソルに関する複体が有界になるとは限らないので、平坦分解の長さが有限になるという仮定をおく。

### 2.1 弱大域次元

命題 2.1.  $A$  を環とする。

1. 自由加群は射影加群である。
2. 射影加群は自由加群の自由加群の直和因子である。
3. 射影加群は平坦加群である。
4.  $n \geq 0$  を整数とする。次の条件 (a)–(b)<sup>op</sup> は同値である。
  - (a) 任意の  $j > n$ ,  $N \in \text{Mod}(A^{\text{op}})$ ,  $M \in \text{Mod}(A)$  に対し,  $\text{Tor}_j^A(N, M) = 0$
  - (b) 任意の  $M \in \text{Mod}(A)$  に対し, 分解

$$0 \rightarrow P^n \rightarrow \cdots \rightarrow P^0 \rightarrow M \rightarrow 0 \quad (P^j \text{ は平坦})$$

が存在する。

- (b)<sup>op</sup> 任意の  $M \in \text{Mod}(A^{\text{op}})$  に対し, 分解

$$0 \rightarrow P^n \rightarrow \cdots \rightarrow P^0 \rightarrow M \rightarrow 0 \quad (P^j \text{ は平坦})$$

が存在する。

証明. 1.  $M$  を自由加群とする。左  $A$  加群の全射  $g: N \rightarrow N'$  に対し,

$$g_*: \text{Hom}_A(M, N) \rightarrow \text{Hom}_A(M, N') \quad \text{in } \text{Mod}(\mathbf{Z})$$

が全射であることを示す。  $\psi: M \rightarrow N'$  を  $A$  加群の射とする。  $I$  を  $M \cong A^{\oplus I}$  となる添字集合とすると任意の  $m \in M$  は,  $M$  の生成系  $(m_i)$  と  $(a_i)_i \in A^{\oplus I}$  を用いて,  $m = \sum_{i \in I} a_i m_i$  とかける。このとき,

$$\psi(m) = \sum_i a_i \psi(m_i) \in N'$$

であり,  $g$  が全射なので,  $n \in N$  で

$$g(n) = \psi(m) = \sum_i a_i \psi(m_i), \quad \psi(m_i) = g(n_i)$$

となるものがある。この  $(n_i)_i$  に対して,  $\phi: M \rightarrow N$  を

$$\phi(m_i) = n_i$$

で定めると,

$$(g_*(\phi))(m_i) = g \circ \phi(m_i) = g(n_i) = \psi(m_i)$$

となる.

2.  $P$  を射影加群とする. 自由加群  $A^{\oplus I}$  と全射  $p: A^{\oplus I} \twoheadrightarrow P$  が存在する. 実際,  $I = P$  として,  $p$  を  $p((a_x)_{x \in P}) = \sum_{x \in P} a_x x$  と定めればよい.  $Q = \text{Ker } p$  とすると,

$$0 \rightarrow Q \hookrightarrow A^{\oplus I} \twoheadrightarrow P \rightarrow 0$$

は完全列である. このとき,  $P$  が射影加群であることから,  $\text{id}_P$  に対して,  $u: P \rightarrow A^{\oplus I}$  で

$$p_*(u) = p \circ u = \text{id}_P$$

となる者が存在する. したがって, 上の完全列は分裂し,  $A^{\oplus I} \cong P \oplus Q$  となる.

3.

□

## 参考文献

- [KS90] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Sheaves on Manifolds*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 292, Springer, 1990.
- [KS06] Masaki Kashiwara, Pierre Schapira, *Categories and Sheaves*, Grundlehren der Mathematischen Wissenschaften, 332, Springer, 2006.
- [Sh16] 志甫淳, 層とホモロジー代数, 共立出版, 2016.